

倉敷村出身の文化人・井上端木の生涯 ～法橋になった古禄～

はじめに

井上端木 明和5年(1768)年～天保11年(1840)

倉敷村出身の画家・歌人。倉敷村の古禄宮崎屋井上家第9世・井上五蔵(素堂)の子として生まれる。通称三左衛門、三郎右衛門のち広輔(祐)。名は常之、字は端木。慶雲、慶雲斎と号す。寛政7年(1795)に家督を継いで宮崎屋第10世となり倉敷村の年寄を務めるが、隠居して文政4年(1821)ころ上京し京都で画家として活躍する。鶴の絵を得意とし多くの作品を残した。また絵画のみならず、和歌・俳句・雅楽・能楽・蹴鞠などの芸にも通じ、御所・青蓮院門跡や公家・武家などに招かれて芸を披露したり指導をしたりしている。文政10年(1827)青蓮院門跡により法橋※に叙せられた。『平安人物志』※にもその名を連ねる近世倉敷村きっての文化人である。

※『平安人物志』…近世京都在住の文化人・知識人などを掲載した人名録。明和5年版から慶応3年版の全9版があり、うち5カ所に端木が掲載されている。また『平安人物志』に掲載された人物のうち708人を選びその作品(短冊)を収録した『平安人物志 短冊集影』にも掲載されている。

※法橋ほっきょう…日本の僧位の一つ。中世以降、僧侶に準じて医師、絵師、連歌師などに与えられた称号。

表1 『平安人物志』の端木の記事

| 掲載版 | 分類 | 氏名 | 号 | 俗称 | 居住地 |
|--------|-----|------|--------|------|---------|
| 文政5年版 | 文人画 | 小原広輔 | - | 小原端木 | 御幸町押小路南 |
| 文政13年版 | 文人画 | 小原広輔 | 僊客・慶雲斎 | 小原端木 | 木屋町三条南 |
| | 文雅 | | | 小原端木 | |
| 天保9年版 | 和歌 | 小原端木 | - | 小原慶雲 | 木屋町三条南 |
| | 文人画 | | - | - | |

『平安人物志 短冊集影』掲載の端木の短冊

山家鶯

やま窓の明ければ来鳴鶯に友恋しとも思はさりけり

1 井上家について

(1) 井上家の祖先……井上家略系図参照

家伝によると祖先は甲斐源氏加賀美遠光かがみとほみつの子小笠原信濃守長清※。長清は承久の乱の際の功績により阿波国守護に補任され、その子孫が阿波の高島(現・徳島県名西郡石井町藍畑高島あいはたかほたけ)に居住し高島氏を名乗った。応永年間(1394～1428)に高島清貞が備前児島へ渡り高島城(玉野市上坂)に在城。さらに高島和泉守が備前小串城(岡山市南区小串)に元龜3(1572)～天正17(1589)在城。和泉守の息子・市正(市之丞あるいは右近)貞政が宮崎村(現・都窪郡早島町宮崎一帯)に移り住んで新田開発に従事。また文禄2年(1593)には御崎宮(現・鶴崎神社)の改築をしたという。市正の次男・新右衛門が倉敷村に移り住むが、その時期は不詳。ただし、おそらく文禄から慶長初年と考えられる。倉敷村に移住後、井上姓を名乗った。屋号宮崎屋は宮崎村にちなむ。

※小笠原長清(1162～1242)…甲斐源氏加賀美遠光の子。平家に属していたが後頼朝に従い信濃国伴野庄の地頭となる。承久の乱の際の功績で阿波国守護に補任。子孫は信濃小笠原氏の基礎を築き「馬達者」といわれ6世貞宗は弓馬の道を家芸として將軍家に奉仕する「小笠原流」を創始した。

(2) 歴代当主……井上家略系図参照

(3) 近世の井上家

倉敷村で庄屋や村役人、酒造株などを独占してきた古禄 13 家の中の一軒であり、その中でも最も早く倉敷村に移住した家と推測される。3代・三郎右衛門から明治初年の井上亮三まで断続的に年寄役を勤めた。江戸時代後期に起こった新禄・古禄の抗争※で多くの古禄が没落していくなか、井上家は家産を維持した。歴代当主からは和歌・俳句・絵画など文化面に秀でた人物を輩出し、僧侶や神職になった当主もあった。

※新禄古禄騒動…倉敷村における有力町民間の村政主導権をめぐる争い。古禄(古い有力な家)と新禄(新興の富裕層)が宝暦3年(1753)から弘化4年(1847)まで長きにわたって争った村方騒動。寛政から文化文政期に対立が激化し古禄の勢力が衰退した。

2 井上端木の生涯

(1) 幼少・青年期…史料なく事跡不明。実母・くらは端木を産んですぐに他界。

i 両親の影響を受け幼いころから諸芸を学ぶ。

「…幼き頃よりくさぐさのわざ学び侍れど」(『鄙塵集』)

「我わかりし時よりみやこ小沢翁のながれをくみ折々は行て道のおしへなどを聞侍り」

(和歌詠草 2-22-A-9)

ii 優れた和歌の才能をもった両親の元で育つ。

井上素堂(1740～1803)

宮崎屋6世・永俊の子として生まれる。通称善左衛門のち五蔵、剃髪して素堂と号す。初め分家の花屋を継ぐが兄の死去により宮崎屋9世となった。和歌を香川景平のち小沢蘆庵に学ぶ。

ひろさだ夏鼎の名で多くの和歌を残しており歌集に『杜乃したくさ』歌論書『泣岐抄』などがある。

井上政子(1748～1812)

讃岐琴平の菅政甫の長女。明和6年(1769)22歳で井上素堂の室となる。名は初めりえ、後くが。雅名政子。夫と共に小沢蘆庵に師事。蘆庵の死後は小川へいりゅう萍流に学ぶ。紀行文『他飛迺たびの瑛記』は文化4年(1807)に常之(端木)とともに上京し都での日々を綴った旅日記。ほかに歌集『萩亭集』などがある。

(2) 宮崎屋当主としての端木

寛政7年(1795)28才で家督を継ぎ宮崎屋の経営にあたる一方同年から文政3年(1820)まで倉敷村年寄を務める。

宮崎屋の経営

- ・金融業
- ・地主経営
- ・酒造業
- ・薬種の商い(取次?)

(3) 倉敷村年寄役としての端木

・倉敷村年寄…村役人の役職の一つで庄屋を補佐した。年によって定員に異同があるが端木の頃の倉敷村年寄は5名が月番で務めていた。

・代官やその下役との密接な関係

商人たちは代官や代官下役の手附らと親密な交流があり、彼らが転任になった後も交流が続いた。手附らを通じて代官所への願い事をしたり政治的な情報を得たりしていた。

・倉敷代官大原信好の手附・小林金之助※との交流

※小林金之助景賢…大原代官の手附。端木の書状に名前が頻出。転任の後も端木と交流が続き和歌を端木に学ぶ。江戸の屋敷に端木を逗留させ、法橋の件では端木のために知り合いの役人に問い合わせをしている。端木の書状によれば百姓たちからの人望が篤かったとされる。⇒意訳文①

・新禄古禄騒動の激化と年寄役退役⇒意訳文②③

端木が当主の頃対立が激化。双方の確執が史料からも読み取れる。

退役の理由…庄屋七太夫の退役にあたり(実際は退役しておらず岡山へ行っていた)村の重要書類などを井上家が預かった事を新禄たちから攻撃され、これに激怒。剃髪して自ら寺に謹慎し代官所に退役を願い出る。

・新禄らを攻撃する一方で植田家・大橋家などの新禄との交流が認められる。

表2 古禄の衰退

| | 寛永 19 | | 天和 4 | | 正徳 元 | | | 文政 2 | | | 文政 12 | |
|-----|-------------|----|---------|----|--------|--------|----|--------|-----|----|--------|----|
| | 持高 | 村役 | 借家 | 村役 | 持高 | 下男女 | 村役 | 持高 | 借家 | 村役 | 持高 | 村役 |
| 紀国屋 | 石 141.83 | 庄 | 軒 43 | 庄 | 176.77 | 人 9 | 庄 | 6.53 | 19 | 庄 | 4.28 | 年 |
| 蔦屋 | 39.03 | 組 | 18 | 年 | 44.67 | 4 | 百 | 33.06 | 19 | 百 | 33.02 | |
| 宮崎屋 | 25.44 | 々 | 6 | 々 | 31.50 | 3 | 々 | 118.02 | 84 | 年 | 115.61 | |
| 和泉屋 | 21.09 | 々 | 22 | 々 | 35.29 | 5 | 年 | 5.26 | 11 | 百 | 0.03 | |
| 井筒屋 | 18.35 | | 4 | 々 | 20.87 | 7 | 百 | 374.34 | 319 | 年 | 406.42 | 庄 |
| 大島屋 | 11.13 | 組 | 22 | 々 | 203.66 | 18 | 年 | 40.89 | 9 | 百 | 40.63 | |
| 播磨屋 | 56.89 | 々 | 11 | 百 | 64.94 | 6 | 百 | 1.44 | 1 | 々 | 2.18 | |
| 油屋 | 33.66 | | 12 | 々 | 63.55 | 7 | 年 | 73.78 | 48 | 年 | 18.28 | |
| 俵屋 | 31.08 | | - | 々 | 30.24 | 4 | 百 | 23.98 | 12 | 百 | 21.83 | |
| 銭屋 | 19.66 | | 21 | 々 | 44.33 | 9 | 年 | 62.56 | 17 | 年 | 64.59 | |
| 瀬尾屋 | 10.91 | | 15 | 々 | 108.22 | 21 | 年 | 76.22 | 43 | 々 | 48.87 | |

註 『新修倉敷市史』4近世(下)296頁より転載

※井上家の持高は増加している

(4) 京都での暮らし ～極楽の日々～

- ・文政3年(1820)隠居して養子三郎右衛門(惟寧・花屋善左衛門三男)に家督を譲る。
- ・文政4年ころ京都に上る? → 文政5年の『平安人物志』にすでに掲載されている。
- ・はじめ御幸町押小路南に後、木屋町三条南に居住し多くの文化人と交流。
- ・絵画・和歌・蹴鞠・乱舞・太鼓・笛などの芸によって生計をたてる。
- ・千種家※に仕え青蓮院門跡※や堂上家(昇殿を許された公家)にしばしば招かれ参殿。

⇒意訳文④⑤

※千種家…村上源氏の嫡流・久我晴通の孫・岩倉具堯の子・有能を祖とする。羽林家(撰家・清華家・大臣家に次ぐ公家の家格の一つ)。明治に至り華族に列す。江戸時代後期の当主・有功は歌人として有名。

※青蓮院門跡…東山区粟田口にある天台宗の寺院。粟田御所。法親王・入道親王が住持として居住した宮門跡の一つ。多くの天台座主を出した。

表3 端木と交流があった文化人たち

| | 氏名 | 生没年 | 備考 |
|-------|-------------|-----------|-----------------------------------|
| 親王・公家 | 青蓮院宮(尊宝法親王) | 1804～1832 | 青蓮院門跡。223世天台座主。伏見宮貞敬親王次男 |
| | 近衛(忠熙) | 1808～1898 | 安政4年左大臣。後に関白、内覧、氏長者となる |
| | 二条(斉信) | 1788～1847 | 文政7年左大臣 |
| | 千種有功 | 1797～1854 | 和歌を一条忠良・飛鳥井家に学ぶ。香川景樹・加茂季鷹らと交流 |
| | 飛鳥井(雅光) | 1783～1851 | 江戸後期の公卿・歌人。従一位大納言 |
| | 穂波(経治) | 1824～1842 | 穂波家(勸修寺家の庶流の堂上家)当主。勸修寺経則の子 |
| | 東儀伊勢守(如寿) | 1793～1846 | 雅楽を伝える家・東儀家の当主 |
| 文化人 | 岸駒 | 1756～1839 | 江戸中・後期の画家。加賀国金沢の生まれ。岸派の祖 |
| | 松村景文 | 1779～1843 | 江戸後期の画家。花鳥画を得意とした。井上可堂の師匠 |
| | 池坊専定(養道) | 1769～1832 | 江戸後期の華道家。池坊家40代。岸駒に学び画もよくした |
| | 金春惣右衛門國義 | 1772～? | 太鼓金春家15世。代々惣右衛門を名乗る |
| | 佐々木真足 | 1761～1838 | 金沢藩の能楽者。本居宣長に入門。小沢蘆庵・香川景樹に学ぶ |
| | 小沢蘆庵 | 1723～1801 | 江戸後期の歌人 |
| | 小川萍流 | 1756～1839 | 江戸後期の歌人。小沢蘆庵に学ぶ |
| | 香川景樹 | 1768～1843 | 江戸時代後期の歌人。桂園派の祖 |
| | 小川弥彦 | 1792～? | 江戸後期の歌人。小沢蘆庵の息子 |
| | 小野重賢 | 1776～1834 | 江戸後期の歌人。小沢蘆庵の弟子 |
| | 加茂季鷹 | 1756～1820 | 江戸中・後期の歌人・国学者。京都上賀茂神社の祠官 |
| | 羽倉信美 | 1750～1828 | 江戸中・後期の歌人。京都伏見稻荷大社の神職。小沢蘆庵門下 |
| | 前波黙軒 | 1745～1819 | 江戸後期の歌人。小沢蘆庵門下四天王の一人 |
| | 菅沼斐雄 | 1786～1838 | 江戸後期の歌人。桂園派の祖。香川景樹に学ぶ桂門十哲の一人 |
| | 熊谷直好 | 1782～1862 | 江戸後期の歌人。香川景樹に学び木下幸文とともに桂園の双璧と称された |
| | 大村重矩樵斎 | 1778～1843 | 江戸時代後期の医師。眼科医。詩歌を好み「平安人物志」にも載る |

註 端木の書状・和歌関係の史料などに名前が見られる人物を抽出。()内は年代から推測した人名。

i 端木と芸術

★絵画

・岸駒^{がんく}※に学び雅号「端木」を与えられる

※岸駒…加賀国金沢生まれの画家。京都に上り明清画・南蘋派^{なんびん}・円山派などを手あたり次第学び独自の画風を築く。岸派を形成して多くの門人を教育した。円山応挙なき後の京都画壇で呉春と人気を二分したが自己顕示欲の強さは人々の矚感をかかったと言われ、画料の高い事でも有名だった。有栖川家・宮廷にも仕え越前守にのぼる。

・大量の製作依頼

京都の公家や知己の武家、倉敷村の井上家や商人・寺院などからの依頼で絵画を製作し、ほかに岸駒・景文らの作品を取り次いでいる。

ex.瀬尾屋藤井彦七郎(承基)から松村景文(四条派の祖松村呉春の異母弟)と端木の三幅対の掛軸や岸駒の葉玉図を依頼される

・「鶴の絵」で有名…鶴の絵を描くために鶴を飼う。後に後樂園に寄付。
井上家では「鶴のおじい様」と呼ばれる。

★和歌

・歌会に出席したり和歌の指導をしたりしている。
・全国に多くの弟子を従えた桂園派の祖・香川景樹とも対等。

★能楽(乱舞^{らっぶ}・太鼓・笛)

・青蓮院や堂上家に参殿し、能の指導・相手をする。金春流に入門し太鼓を学ぶ。
能楽の芸名は「原三左衛門」。
・御所能や各所の舞台へ出演。
・鳳軒(手作りの笛)を携え各所で演奏。

★蹴鞠…堂上家へ参殿し、蹴鞠の相手や指導をする。

☆芸事の指導や披露、画の製作で日々多忙⇒意訳文⑥

🏠 端木の八面六臂の活躍の背景に化政文化※の円熟

※化政文化…江戸時代後期に江戸を中心に栄えた町民文化。文化・文政年間を最盛期とするのでこう呼ばれる。都市・農村を問わず化政前後になると社交や教習が民衆の生活の一部を占めてくるようになり、花道・茶道・香道・和歌・連歌・俳諧・図工・囲碁・将棋など様々な芸道が広く民衆に享受された。また、武士・町民の身分を超えた知識人たちの知的な社交が見られる。倉敷村でも和歌を通じての交流や絵画の購入などが盛んな様子が窺われる。水沢家・小野家・岡家・藤井家などの当主は、みな和歌やその他の学芸を学んでいた。

ii 文政7年の出府

・前倉敷代官大原信好の屋敷や大原の手附小林金之助の屋敷を訪ねる。
・文化6年(1809)の上納銀 18 貫目(約 300 両)の下げ渡しを代官所へ願い出る。
前代官(大原信好)の役人を通じて現在の代官(大草政郷)の役人に掛け合い。

iii 法橋叙任一件

・文政 10 年(1827)8月 1 日、青蓮院の宮から補任状を給わる。⇒意訳文⑦
・法橋叙任につき代官所から「お叱り」を受ける→位を取り上げられる? ⇒意訳文⑧
・小林金之助に依頼して位を取り戻す画策。評定所での内評の情報を得る。⇒意訳文⑨
☆法橋位は取り返せなかった? →背景に朝廷と幕府の微妙な関係。

iv 京の同居人⇒意訳文⑩

- ・おます(もと芸子。戒名・釈妙理法尼。文久3年6月4日没)と暮らし世話をしてもらう。
ただし、妻鼎子(お文)の死(天保3年・端木65歳)以降。

(5) 端木の死⇒意訳文⑩

天保11年(1840)6月末頃から下痢が続き体調を崩し次第に悪化。7月に急変したので三郎右衛門(惟寧)らは急遽上京。端木の希望で船で帰国しようと8月15日に高瀬舟で大坂へ向かったがその途中急変し玉水町の天満屋喜右衛門宅で没した。葬儀は倉敷村の井上家で25日に執り行われた。

3 端木関連の史料から分かること ～史料的高価値が高い井上家文書～

端木関係の史料は京都・大坂・倉敷などの世情や著名な人物などを知ることができる貴重な史料。

(1) 岸駒・佐々木真足・千種有功・伊藤仁斎など歴史上の著名人に関する情報⇒意訳文⑫

- ・岸駒の画料金が安い→1幅2両3分位、3幅対なら7両の極め。
先に画料を渡してからでないとい依頼できない。彩色は御所の御用でも断る。
金沢城二の丸の障壁画を描く。

(2) 歴史上の出来事

i 文政13年の大地震・宇治川洪水⇒意訳文⑬

- ・文政13年7月2日に発生した地震でマグニチュード6.6±0.2と推定されている。この地震では京都市街地に多くの被害を出しており二条城や御所では石垣や築地塀が崩れ町屋では土蔵が損害を受けた。余震も収まらぬうちに大風雨となり鴨川、宇治川があふれ洛中上京、宇治地域が洪水となる。音羽山から土石流が起こり、清水寺の回廊を崩して市内へ押し流した。宇治では地震で半壊状態であった宇治橋が流失した。

ii 天保8年の飢饉・疫病流行の惨状⇒意訳文⑭

- 天保の飢饉や疫病の流行により全国で多くの死者を出した。
京都でも多くの貧しい者たちが亡くなった様子を伝える。

iii 天保8年の大塩平八郎の乱※に関する記述⇒意訳文⑮

- 2月18日、大坂の舟手奉行・本田大膳の屋敷の宴席に招かれて謡や和歌などを披露した端木は宿へ戻ったところ大塩平八郎の乱の風聞を聞く

※大塩平八郎の乱

- …大坂町奉行所元与力で陽明学者の大塩平八郎が天保8年2月19日に挙兵した事件。天保の飢饉で大坂市中にも大被害をもたらしたが奉行所は有効な策を講じず豪商は奢侈な暮らしを続けていたため大塩は門下の与力・同心や豪農とともに挙兵。町に火をかけ豪商を襲い奪った金品を貧民に与えるなどしたが即日鎮圧され約40日の潜伏ののち爆死した。

iv 天保9年倉敷稲荷町の大火⇒意訳文⑯

- 天保9年2月4日の大火。稲荷町から出火し家37軒、60世帯ほどが類焼。

v 天保 10 年京都豊熟都大踊⇒意識文⑩

・天保 10 年 3 月から 4 月、京都市中に起こった熱狂的な踊りの現象。男女貴賤をとわず派手な衣装と仮装で踊り続けた。男は女、女は男になり腰に鈴と鳴子をつけ「踊れ踊れ踊らにゃ損じゃ。踊るあほうに見るあほう同じあほなら踊るがかちじゃ。まけなまけな、ちよとせちよとせ」などと叫んだ。はじめ黙認していた奉行所も達を出しても止まないの「見とがめ次第召し捕る」との通達でようやく止んだ。後のええじゃないかと共通する要素が多い。

まとめ

井上端木が活躍した時代は「化政文化」の円熟期であった。学芸文化の庶民化、中央と地方の文化交流が顕著になったこと等の社会の様相は端木関連の史料からも詳細に読み取ることができ、端木の芸道活躍を充実させた大きな要因と言える。

一方、井上家文書によって新緑古祿騒動、代官所や役人などの動向を端木の視点で知る事ができ、倉敷の歴史を知るうえで貴重な史料といえる

【主な参考・関連文献】

永山卯三郎編著『倉敷市史』第三冊 1973

永山卯三郎編著『倉敷市史』第六冊 1973

『新修倉敷市史』第 4 巻近世(下) (倉敷市 2003)

『新修倉敷市史』第 10 巻史料近世(下) 倉敷市 1997

(財)文化財建造物保存技術協会編『井上家住宅調査報告書』倉敷市教育委員会 1998

岡山県古代吉備文化財センター編『岡山県中世城館跡総合報告書』岡山県教育委員会 2020

『早島の歴史』1 通史編(上) 早島町 1997

山本太郎『近世幕府領支配と地域社会構造』清文堂 2010

山本太郎「近世倉敷村の酒造」『倉敷の歴史』第 4 号 倉敷市 1994

木山巖太郎『倉子城史談』1918

山川菊枝・向坂逸郎編『山川均自伝』岩波書店 1961

高埜利彦「近世の僧位僧官」『近世日本の国家権力と宗教』東京大学出版会 1989

田中潤「門跡に出入りの人びと」高埜利彦編『朝廷をとりまく人びと 身分的周縁と近世社会』

吉川弘文館 2007

竹内誠編『日本の近世 14 文化の大衆化』中央公論社 1993

神作研一「初代梅月堂香川宣阿のこと-堂上と地下の問題を中心に-」

『上智大学国文学論集』26 号 1993

山中玲子「能の「習事」と番組上の小字注記-「小書」という語の意味するところ-」『能楽研究』40 巻

法政大学能楽研究所 2016

渡辺良智「ええじゃないか」の民衆運動(Ⅰ)『青山学院女子短期大学紀要』46 1992

『国史大辞典』吉川弘文館

大石学編『江戸幕府大事典』吉川弘文館 2009